

2021年 7月 国際放送番組審議会

2021年7月のNHK国際放送番組審議会（第682回）は20日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近のNHKの動きについて、続いて最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、「Zero Waste Life」、「Mini-Dramas on SDGs」、「100 Ideas to Save the World」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	阪田 恭代	(神田外語大学外国語学部 教授)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 (一財)日本エネルギー経済研究所 参与)
委員	永井 均	(歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授)
委員	中曾 宏	(株大和総研 理事長)
委員	仲本 千津	(社会起業家、(株)RICCI EVERYDAY 代表取締役COO)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)
委員	村上由美子	(M P o w e r P a r t n e r s ゼネラル・パートナー)

(主な発言)

<NHKおよび国際放送の最近の動きについて>

- 東京2020オリンピックが開催され、日本に注目が集まっている今、国際放送を周知し、視聴を増やすよいチャンスだ。関係者の来日もきっかけになると思うので、選手村での視聴環境整備など、取り組みについて知りたい。また、国内のテレビ番組情報誌で、NHKワールド JAPANの活動を紹介できないか。国内放送と国際放送両方に取り組むNHKとしての一体感を示すほか、グローバルな取り組みの紹介としても、ぜひ取り上げてほしい。例えば二次元コードを掲載することで、NHKワールド JAPANのホームページに誘導することができ、接点を作れると思うので、検討してほしい。
- 東京2020オリンピックは、多くの会場で無観客開催となり、選手の関係者の来日も難しい状況になっている。試合が放送されない国や競技もあると思うので、開催国の国際放送を担うNHKには取材・放送への期待が高いと思うが、どのような取り組みをするのか知りたい。

(NHK側) 選手村では、NHKワールド JAPANがテレビのチャンネルの一つとして入っている。また、インターネット環境があれば、PCやスマートフォンでも見られる。空港などでは、二次元コードを掲載したポスターを掲示し、視聴を誘導するなどの施策を進めてきたが、現在、緊急事態宣言で人の移動が抑制されている状況なので、イベントなどでの積極的な広報は控えている。そのほかSNSを通じた周知の努力を続けていきたい。オリンピック報道について、競技そのものの放映権はないため、許諾を得た限られた競技映像を使用し、主な動きと、日本を含むアジア選手の活躍をニュースの中で伝える。バンコクを含めた中継拠点から、アジア諸国の反応も伝える予定だ。

< 「Zero Waste Life」 Kintsugi: Giving New Life to Broken Vessels

(6月4日 (金) 10:45 ほか)

「Mini-Dramas on SDGs」 Episode3 KINTSUGI-The Art of Repair

(5月18日 (火) 12:58 ほか)

「100 Ideas to Save the World」 #8 Life Lessons Through Food (Clip)

について>

- いずれもSDGsを念頭に制作されており、金継ぎ、食育といった、SDGsのテーマとしてふさわしい題材を扱っていてよいと思う。またショート動画という形でSNSでも見られるようにしている点は評価できる。ただ、SDGsのどのゴールと関係しているのか明確に関連付けられていないことで効果が下がるのではないかと。国連のSDGsのロゴにより関連性が認識されると思うので、ロゴや、どのゴールに関連するかを番組内で示すことが重要だと思う。
- 「Zero Waste Life」は映像表現が細微に至り、壊れた器と人としての自分の価値を重ねて問う印象的な作りになっていた。映像、音楽がすばらしく、茶道に端を発する哲学、金継ぎの技術を紹介する優れたドキュメンタリーだ。ナレーションも落ち着きがありよかった。ただし、Wasteという言葉からは、日本が大量に生み出している産業廃棄物や廃プラスチックの問題を連想する。金継ぎをZero Wasteとして紹介するのは少し本来の意味とずれているように感じた。「Mini-Dramas on SDGs」で、草刈正雄さんの語りに「形ある物はいつか壊れる」とあるように、金継ぎはゴミを出さない行動というより、物を大切に作る伝統として紹介すべきではないか。「100 Ideas to Save the World」では、ナレーションと英語字幕の言葉が一部で一致しないところがあり、気になった。
- 「Zero Waste Life」では、わび・さびという言葉が最初の方に出てくるが、海外の視聴者にはこれと金継ぎとをすぐに結びつけるのは難しい。傷のない元の形に戻すのではなく、壊れた物に新しい価値を与えるという発想なのだ、と理解して初めてそ

の意味がわかるのではないか。「Mini-Dramas on SDGs」は、短い動画にメッセージがこめられており感心した。ただし、実際に自宅で金継ぎをするのは特殊で、大部分の日本人には日常ではないので、誤解を与えないか気になった。「100 Ideas to Save the World」では、学校での料理のシーンで女子生徒が目立っていた。ジェンダー平等もSDGsの目標の一つだ。日本は女性の社会進出が遅れ、家事分担が女性に偏っている印象を持たれがちな側面もあるので、ネガティブな印象を持たれないか気になった。

- 金継ぎを紹介した「Zero Waste Life」は、静ひつな、胸に染み入る番組だ。金継ぎの歴史、技術、金継ぎ師の黒田雪子さんの物語を通して日本の伝統文化を知り、人間の弱さと立ち直る可能性について考えさせ、さらに、現代の消費社会に内省を強く促している。壊れた食器と壊れた心を結びつけ、物と心の再生を隠れたモチーフにした点が内容に奥行きを与えていると感じた。黒田さんの言葉や態度から、芸術が人間の自己回復の契機となることを改めて感じ取った。また、金継ぎの美しさを際立たせる映像や、スローモーションを使って作業の繊細さと、修復に要する時間に思いをはせる手法などに制作者のメッセージを感じることができた。「Mini-Dramas on SDGs」は、金継ぎの精神が、短編ながらうまく描かれていた。草刈さんの演技は自然体で、身近に感じた。自由学園を紹介した動画「100 Ideas to Save the World」は、給食を通じて自然と人間、食と命、他者への思いやりや社会性を育む教育が実践されていることを描いていて、興味深かった。一方で、自由学園での食の試みを一般の人々の日常生活といかに結び付けられるのか、知恵が示されていたら、より奥行きのある内容になったのではないかと感じた。
- 「Zero Waste Life」は、物を大切に物物の寿命を延ばしていこうとする黒田さんの思いが伝わる内容で、勉強になり、興味深く見た。物の修復における欧米との考え方の違いについては、両者の考えをともに認めながら金継ぎの良さを伝えるよう、もう少し丁寧に表現すべきではないかと思った。「Mini-Dramas on SDGs」は、ドラマ仕立てで分かりやすかった。金継ぎは各家庭で普及しているというより、最近では若い人が金継ぎの技術を学び、アクセサリなどの物づくりに生かしている場合が多いので、そういった側面も取り上げられれば、若い視聴者層にもより響く内容にできたのではないかと感じた。祖父、母、娘という三世代の家族設定は、日本の都市部では一般的でなく、少し前の家族構成だと感じ、感情移入しづらい点が残念だった。「100 Ideas to Save the World」では、身近な食を通じて自然界の循環やリーダーシップを学ぶ活動を取り上げたのはよかったが、料理の場面で女子生徒が中心に描かれていた。ジェンダー平等の観点から、男性も女性も取り組みに共感して一緒に作業する姿勢を取り上げると、活動の価値がより高まるのではないかと感じた。
- 「Zero Waste Life」で、傷を美德とする金継ぎの修復の技法が、わび・さびの美意識と深く関わっていると紹介した点は、世界の視聴者の興味を引いたと思う。また、器の修復にかかる長い時間を視聴者に体感させ、その間、作業に没頭することで、人も至福を与えられ、心が修復されていくことを伝えた意義が大きい。また、単に器が再生されるのではなく、傷を生かして修復することで、唯一無二の価値を持った物に

生まれ変わるという考えは、現代社会の中で多様性を認め合うことを実現する考え方にもつながるように思う。さらに、黒田さんの「持ち主が喜ぶことがうれしいが、器が捨てられなくなった喜びの方が大きい」という言葉は、大量消費、大量廃棄社会に対する警鐘となる重要なメッセージだと思う。15分の短い番組だが、映像の質が高く秀逸な表現が数多くあった。「100 Ideas to Save the World」で取り上げられた学校給食は、海外では珍しいシステムで、生徒たちが自給自足を実現していることも含め、海外視聴者に驚きを与え、関心を持ってもらえる内容だ。生徒たちが、人間関係を学び、成長しているという点も興味深く、高品質な内容だった。

- 「Zero Waste Life」は映像が美しく、また、わび・さびの概念を、金継ぎを通してわかりやすく説明しており、視聴者のわび・さびの精神への理解が進んだのではないかと。動画配信サービスにより世界に発信され、アメリカを中心にブームとなった、日本人片付けコンサルタントの番組では、家の中で使われなくなったものを処分するプロセスが人気で、この番組で紹介された捨てずに修復する金継ぎが、逆のコンセプトであると感じ、混乱したのではないかと。視聴者の反応が気になった。「100 Ideas to Save the World」の食育についても、やはり少し前に日本発で大変よく見られた、日本の小学校で生徒が白衣を着て自ら配膳する給食システムを紹介したSNS動画を思い出した。海外の学校とは異なる食育のシーンが、珍しがられ、よく見られたのだと思う。今回は、さらに生徒が自ら作る、という点も加わり、興味を持たれたのではないかと。ただし、日本全国で自由学園と同じ活動が広がっているという誤解も生んだかもしれない。また、意図的ではないにせよ、女子生徒が料理をするシーンがクローズアップされていたのは、日本古来の家庭のあり方を想起させる可能性もあった。これらの点はもう少し配慮されるべきではなかったか。
- 「Zero Waste Life」は、黒田さんのやわらかな語りから、一度は壊れてしまった繊細な心が金継ぎで新たな命を吹き込まれ、器と同じように新しい境地に到達した安堵感が伝わってくる番組で魅了された。クローズアップされた黒田さんの手が、技を究めるまでの道のりの陰しさを雄弁に物語っており、ほぼ全編にわたって聞こえるカエルの声、丸くなって眠っている猫の姿などの演出効果もすばらしかった。結果として黒田さんの存在感や金継ぎの持つ不完全の美の印象が強く、主題のZero Wasteのメッセージが、目立たなかった印象だ。物を大事に使うことで、その物が世代を超えて大切な物に変わっていくというメッセージは、「Mini-Dramas on SDGs」にコンパクトにまとめられ、ストレートに伝わっていたと思う。「100 Ideas to Save the World」では、食材を育て、食事を作る共同作業から学ぶチームワークの大切さなど、持続可能な社会の構築に必要な視点を生徒に与えたと思う。百年も前から今日のSDGs的な要素を持った教育を施していた、自由学園の先見性がとても印象に残った。持続可能な社会をつくっていく上で教育がいかに大切なのか、改めて認識したよい番組だった。
- SDGsはさまざまところで話題になっているが、持続可能性という観点から、経済界ではESG投資に取り組み始めるなど、この先を見据えた広い関心につながる動きがある。また国際社会では気候変動に対処するための脱炭素の実現について議論

が続いている。このようにSDGsは幅広い概念で、時々行う身近なキャンペーンではなく、2030年、あるいは2050年、その先に向けて、恒常的に国際社会が抱える世界的な課題と位置づけて取り上げるべきだと思う。どの番組もNHKらしい視点で、日本のすばらしい点を紹介できているが、それが、国際社会が抱える課題にどうリンクしているのかを示していくべきだと思う。例えば金継ぎとイタリアの修復技術とを結びつけ、修復の概念の違いを乗り越えてつながりを探るなどすれば、国際的な広がりを持たせられる。フィレンツェの修復研究所では、和紙や日本の大工職人が使うのみなどが修復に非常に価値があるとされている。「100 Ideas to Save the World」の自由学園の取り組みをもとに、続けてフードロスの問題について考える議論を実施するなど、うまくいっている点と課題を組み合わせる展開させることもできる。日本の魅力に加え、日本が抱える問題点も、常に念頭におき、SDGsの番組を発信すべきではないかと考える。また、アフリカなどの貧困の問題とこのテーマを連携させ、給食の導入や食育により、母親が働きに出られるようになれば貧困の改善につながる、などの視点も取り入れられればさらに番組に広がりが出る。ぜひ、今後5年、10年先を見据えたキャンペーンを展開してほしい。

- いずれも優れた番組だった。「Zero Waste Life」は、効率優先、大量消費、大量生産という現代社会に対する強烈なアンチテーゼになっている。傷に気付かないような修復がすばらしいという価値観から、傷自体が美しいという価値観への転換は、新鮮な発想で興味深い。わび・さびとの関連で欧米との対比もあったが、例えばイギリスやフランスでは、家には手入れしながら長く住み、物も大切にしている印象がある。海外との対比はもう少し慎重であったほうがよいのではないか。また、断捨離や捨てることがすばらしいという価値観が国内外で広がっている中で、捨てるにずっと使い続けるという価値観が、せめぎ合いつつ、どう折り合いをつけ、社会に受容されていくのか、大変興味深い。「Mini-Dramas on SDGs」は、先に「Zero Waste Life」を見たため、よく理解でき、短い時間の中でメッセージを受け取ることができたが、単独で見えていたら、同じような理解ができたかどうか、若干疑問を持った。「100 Ideas to Save the World」については、給食が単に食を大切にすることの重要性を学ぶ場であるということだけではなく、途上国では子どもの貧困対策や就学支援として貢献しているというメッセージが入ると、SDGsの複数のゴールに関連づけられ、理解が広がると思う。

(NHK側) SDGsキャンペーンは、長く続けるべきものと考えており、来年度も番組の一環としてきちんと位置付けたい。「Zero Waste Life」については、配信で連携している、アメリカの公共放送局のメインチャンネルでの配信も決まっている。国際放送の重点地域であるアメリカでも、SDGsや環境問題に対するニーズが高いことを念頭に置いて長く取り組みたいと考えている。今回の番組では、ポジティブな面を中心に紹介したが、フードロスも含め大量廃棄が行われている現実もある。課題解決の道を探ることを含め、今後さらにキャンペーンを発展させていきたい。

(NHK側) 「Zero Waste Life」のWasteでイメージするのは廃棄、ゴミであり、

金継ぎとは結びつきにくいという指摘について、物を大事にすることで心が癒されていく、また不完全な物の中に美しさがあることを伝えることで、捨てる行為を減らすことにつなげたいと考えた。ゴミを出さない生活、という日常的なメッセージだけではなく、ものを大切にする生き方が伝わるシリーズにしたい。わび・さびについて、海外の番組モニターからは、概念がわかりやすく説明されていたという反応もあったが、難しいのでは、という意見もあったので今後の制作に生かしたい。また、物の再生した姿を美しいと感じ、癒やされたが、同時に自分たちの大量生産・大量消費を内省させられインスパイアリングだった、というコメントも多く、番組のテーマは、一定程度受け止められたと感じている。日本人片付けコンサルタントが、不要な物を捨てるプロセスを紹介して人気を得ていることと、黒田さんの生き方は確かに異なるが、どちらがよいということではなく、持続可能な生活を目指す際、これまでのライフスタイルや価値観を変えることも必要だ、ということが伝わるのが重要だと思う。黒田さんのヒューマンドキュメンタリーの側面が強くなる分、「Zero Waste Life」のメッセージが希薄になったのではないかと指摘について、制作過程では、黒田さんの人間的魅力を伝えることにも比重があった。生き方の中に、「Zero Waste Life」のメッセージを見つける試みは続けるが、人生の起伏とともに、取り組みの詳細な内容に重点をおく回もある。さまざまな角度から「Zero Waste Life」を発信していきたい。

(NHK側) 「Mini-Dramas on SDGs」は、今後、国内で放送する際に、連続テレビ小説「なつぞら」と同じキャストが祖父と孫を演じることに注目してもらいたい、と考えた。こうした家族設定が現代に合わないと感じられるかもしれないという指摘、また金継ぎが若いクリエイターに注目されている点などは、今後の参考にしたい。SDGsのどのゴールに当たるかについては、一部の番組を、インターネットでショート動画として発信する際に、関連情報を画面上に加えた。今後、SDGsのウェブサイト構築する中で、ゴールごとに番組をタグ付けするなど、目標を関連づける工夫をしていきたい。「100 Ideas to Save the World」で、ナレーションと字幕が微妙に違っているが、動画をSNSで発信する際、音声を消して見ている人が多いことをふまえ、ナレーションの概要を字幕にしている。字数の制限で、そのまま字幕にできないため、一部異なっている言葉があるが、なるべく不自然でないように、今後も気をつけて作成する。料理のシーンについては、女子生徒が主に担当する日に取材を行ったため、結果的に、女子生徒が目立つ映像となった。海外の番組モニターからも同様の質問があったので、今後、ジェンダー平等の視点は、一層意識して制作したい。

2021年 6月 国際放送番組審議会

2021年6月のNHK国際放送番組審議会（第681回）は15日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「国際放送番組と発信の在り方」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	鎌田由美子	(株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	阪田 恭代	(神田外語大学外国語学部 教授)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 (一財)日本エネルギー経済研究所 参与)
委員	永井 均	(歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授)
委員	中村 勇吾	(インターフェースデザイナー、tha ltd. 代表)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)
委員	村上由美子	(MPower Partners ゼネラル・パートナー)

(主な発言)

<国際放送番組と発信の在り方について>

- NHKの国際放送は、約160の国と地域、3.8億世帯で視聴可能とのことだが、さらに世界中のどこでも視聴できるように努力を続けてほしい。受信環境の整備には、技術的な問題を含めて難しい課題があることは承知しているが、世界中のどこからでも視聴できることを目指すことは、NHKならではの取り組みであろうと思う。次に、在外邦人向け日本語チャンネル、NHKワールド・プレミアムでは、大変良質な番組を放送できていると思う。速報性のあるニュースや情報に加えて、国内で話題になっている番組が放送され、海外の暮らしの中でも日本国内と同じ番組を共有していることで安らぎを感じられる。NHKの国際放送には日本の文化、歴史や伝統を世界に発信する番組を、引き続き編成してほしい。海外に住んでいると日本について説明する場面に役立つ材料が必要になる。NHKには、日本について理解を深めるのに有用な番組が数多くあるので、日本人自身が、日本について発信するよい材料を得ることができる。また、国内の外国人への情報提供も重要だ。災害や感染についての安全情報は、日本に住む外国人の生活の基盤であり、ワクチンや出入国に関する情報のニーズも高まっているので、役立つ情報を速く伝えることが必須だ。NHKワールド JAPAN

全体の戦略について、他の国際ニュースチャンネルとの差別化を考えると、アジアからの情報を重視することが重要ではないか。毎日のニュースの中でアジアに特化したニュースを増やすなど、多様なアジアの情報を提供できるとよいと思う。

○ NHKならではの役割として、多言語化が大変重要だと思う。特に、新型コロナウイルスの感染拡大の中、移動や出入国の情報を正確かつ迅速に伝えることは、NHKだからこそその役割で、多言語で伝えることで届く範囲が増える。多言語化を進める際のコストについて、最近はデジタルツールを使ったさまざまな翻訳ビジネスモデルが出てきているので、うまく活用し、コスト管理も進めながら、効率的に多言語化を拡充してほしい。また、世界に数多くのニュースチャンネルがある中で、他のチャンネルとの差別化が重要で、アジアや日本のカラーを少し強める工夫をするなど、議論を深める必要があると思う。

○ NHKワールド JAPANの、基本となる構成要素はニュースであり、ニュースの公平・公正、速報性を旨とする品質維持には継続して精力的に取り組んでほしい。東京の深夜時間のニュースをニューヨーク発とする、2拠点を活用した24時間体制の発信はよい試みだ。AI自動翻訳による字幕は、英語以外の言語で利用しているとのことだが、将来的に精度が高くなっていけば、制作コスト削減もできると思うので、英語についても、AI自動翻訳による字幕方式に切り替えることもありえるのではないか。

世界の視聴者の求めるコンテンツは、二極化が進んでいる。動画共有サイトやSNSのような、ユーザー自身が制作する、即興性、話題性重視のものと、動画配信サービスに代表される、制作費をかけて価値を極限まで高めたコンテンツだ。NHKワールド JAPANは、高品質なコンテンツも発信していて、後者に近いと思うが、世界の若い視聴者を獲得するため、SNSなどのコンテンツ充実も図っていくべきだ。

○ 多言語での発信を強化し、国内の外国人向け情報発信に注力することは、非常に大事だ。特に災害情報については、日本人でも行政サービス等の説明がわかりづらいと感じることがあり、国内在住の外国人が理解するためには、NHKからの情報が頼りになるだろう。一方、ニュース以外の、NHKならではの、日本を伝えるコンテンツもますます重要になる。外国人が持つ日本のイメージと現実が異なる場合もあり、今の日本を正しく伝えるコンテンツを充実させてほしい。

(NHK側) NHKの国際放送が、世界中のどこでも視聴できることが望ましい。現在は、ライブストリーミング配信を行っているので、インターネット環境があれば、すべての地域で見られるようになっている。衛星を通じたテレビ放送の受信環境整備にはコストがかかるため、選択して環境整備を行う必要がある。在外邦人向け日本語チャンネルのNHKワールド・プレミアムも、より充実させたいと思っている。NHKワールド JAPANは、アメリカの公共放送局と提携してさまざまな番組を配信しているが、他とは異なる視点や内容が評価されている。アジアや日本の情報が充実している点が、高く評価されているものと考えている。また、アメリカの視聴者へ

独自の調査を行った結果では、回答者の多くが、NHKワールド JAPAN はPBS、BBCと並んで内容が公平であると回答している。公平で、他のチャンネルにない情報を得ることができるという点を、今後も意識して発信していきたい。コスト的にも効率的な運営が求められることから、ネット配信も積極的に進めていく。また、英語からのAI自動翻訳も導入し、ネットでは、多言語での同時配信も行っている。自動翻訳はコストが抑えられ、英語以外の言語については、精度も利用者に満足してもらえるレベルまで到達しており、多言語サービスの拡充にとって重要な技術だ。日本語から英語への翻訳については、NHK放送技術研究所で自動翻訳の技術開発を進めており、台風や地震など、災害情報の一報は、自動翻訳によるものをベースとし、最終的に人がチェックしている。速報性が求められる場面では、自動翻訳が力を発揮する。NHKワールド JAPANの特徴は、1時間の内、前半30分がニュース、後半の30分が番組という構成だ。後半の番組部分に、高品質なドキュメンタリーなどを編成していることが、アジアや北米地域から好評だ。前半のニュース、後半の番組、という編成で、内容の充実と他の国際ニュースチャンネルとの差別化をはかりたい。また、若い視聴者に届く内容を目指すことは重要課題で、動画共有サイトなどのインターネットを活用した施策を考えていきたい。

- NHKワールド JAPANの国内在留外国人への認知向上について、テレビを持たず、携帯電話やパソコンを使う人が多いことを念頭に、いつでも、どこでも、見られることを周知することが重要だ。ライブストリーミング配信の存在を認識していれば、在留外国人も、ホームページやアプリを定期的にチェックするのではないかな。今年度以降、インターネット配信により注力していくデジタルシフトを計画しているとのことなので、認知向上に力を入れるべきだと思う。NHKの日本語ウェブサイト「NHKオンライン」のトップページでも、もっと積極的な広報ができないか。広報月間を設定するなど、アピールを強化する工夫も有用だと思う。また、在留外国人の窓口である出入国在留管理庁や自治体と連携して働きかけを行えないか。二次元コードによる誘導のほか、紙媒体による周知も効果的だ。さらに、公共交通機関への関連情報の掲示も積極的にやる価値がある。バスの中でNHKワールド JAPANの新型コロナウイルス感染に関する情報が掲出されているのを見たことがあるが、公共交通機関の中でこうした情報に出会えるのはよい。また、国内放送で外国人の出演者がいる番組で、NHKワールド JAPANについて紹介があれば、周知に役立つのではないかなと思う。
- 送信網の改革に伴い、デジタルシフトを目指すことで、発信の拡大する可能性が出てきたと感じる。インフラが整ったところで、次は、どのような方法で情報提供を強化していくかがポイントだ。ニューノーマルと言われる新たな社会の中で、ニュースを中心に、アジアの公共放送として信頼される重要な情報を伝えていくことを心がけてほしい。また、日本の今を正確に伝えることが重要で、例えばジェンダーの問題についても、ステレオタイプの日本観が固定化されないように、変化する日本の今をより正確に発信してほしい。アメリカのみでなく、アジアの中で、どのように見てもらうのかをぜひ考えてほしい。また、ネットを見る若い世代に、どうすればNHKを身

近に感じてもらえるのかを調査し、施策を考えてほしい。在留外国人に向けた周知について、大学を通じて留学生のコミュニティーにアプローチする施策は実施されているが、加えて、外国人のビジネスコミュニティーなどの関係者と積極的に連携してSNSによる拡散を目指すなど、関係者を増やして巻き込んでいく仕掛けを考えてはどうか。

- まず多言語化の流れについては、必須だと思うので、取り組みを高く評価したい。災害情報など、命にかかわる情報が多言語で提供されてこそ、NHKワールド JAPANの存在意義が高まると思う。ニューヨークスタジオ発の「NHK NEWSLINE」を視聴したが、そのラインアップが、戦略的で非常に良かった。アメリカのニュースをトップ項目におき、インターナショナルニュースに展開、その中でアジアの情報から日本の情報へという流れになっていた。アメリカで視聴しやすい時間帯のニュースなので、まず身近なニュースから入って、NHKならではのアジア・日本のニュースに向かう流れは、よく計算されている。ニューヨークスタジオが生かせるニュース発信を今後も続けてほしい。ウェブサイトについて、さまざまな情報が載っており、オンデマンドサービスもあるので楽しめるのだが、さらに改良の余地はありそうだ。まず、トップページの上部にキーワード検索機能がない。個別の項目に入るとあるのだが、トップページにあれば使いやすい。また、ウェブサイト上に「About NHK WORLD-JAPAN」という説明ビデオが掲載されていて、よくできている。こうした動画を活用する方法として、番組の間に編成してはどうかと思った。

(NHK側) アジアの情報については、「NEWSLINE ASIA 24」に加え、夜8時放送の「NEWSROOM TOKYO」のバンコクからの中継で、アジアの一日の情報を6～7分でまとめて伝えており、夜9時、10時、11時の「NHK NEWSLINE」でも取り上げている。国内在留外国人への周知については、さまざまな形で取り組んでいかなければいけないと考えている。自治体国際化協会（CLAIR）などと連携して自治体の窓口につないでもらい、830の自治体に情報を提供している。JR、私鉄等の公共交通機関にも、必要に応じて情報を提供し、特に台風の際の計画運休の周知などをきっかけに、連携強化している。そのほか、大学やビジネスコミュニティー、大使館等を通じてできるだけNHKワールド JAPANのサービスを知ってもらうことが重要だと認識している。多言語サービスを、一部ラジオ第2放送や、インターネットでそのまま流していることも含め、認知をできるだけ拡大していきたい。ウェブサイトトップページのキーワード検索機能などの改善や、チャンネル説明動画の放送での活用についても、必要に応じて今後検討していきたい。

(NHK側) 番組の間にチャンネルを紹介する映像を流すことについては、国内放送では、公共放送としてのメッセージや新型コロナウイルス関連情報を含めた2分のスポット番組などの放送を増やしている。国際放送でも同様の方法ができないか、検討していきたい。

(NHK側) ニューヨーク発の「NHK NEWSLINE」について、できるだけ北米の視聴者に親しみを持ってもらえるよう、冒頭はアメリカのニュースを伝えるというのがニューヨーク発信のコンセプトだ。続いて、インターナショナル、アジア、日本のニュースという流れを考えた。今後、さらに内容を充実させてニューヨークスタジオならではの発信をしていきたい。

- 自然科学系の番組で、特に地球科学に関する番組について、必要なデータをきちんとグラフなどで示したり、難しい専門用語も、言い換えたり説明を添えたりして、ポイントを押さえて、よく作られていると思う。地震や火山に関わる災害については、さらに発信に力を入れてほしい。こうした災害が起こる可能性があり、人口が多く影響が大きくなる可能性がある地域は、インドネシア、フィリピン、南米のチリなどだ。日本で制作された番組が身近ではない地域だが、防災の観点から、ぜひこれらの地域の視聴者に地球科学系の番組が届けばよいと思う。災害に対するハザードマップを作るのは地元の自治体なので、命を守るために、地震や水害でどれぐらいのリスクがあるのかを、自治体がきちんと把握して動かなければならない。それらの関係者に、NHKの国際放送で役立つ番組があることが伝わるように取り組んでほしい。
- NHKワールド JAPANのインターネットサービス、スマホアプリや、ウェブサイトのデザインに目を向けてみると、さまざまなサービスの情報が並列的に示されており、盛りだくさんで、相対的に少し前のデザインとサービス、と見えてしまうのではないかと、という印象をもった。この10年で、動画共有サイトや動画配信サービスの存在感が大きくなり、いずれも、映像コンテンツを視聴するためのプラットフォームとして、その機能を絞り込み、価値を最大化することに戦略的に取り組んできている。そういった動きを見慣れたユーザーが、NHKワールド JAPANのウェブサイトを見ると、サービスの内容を把握しづらいと感じるのではないかと。さまざまな情報に目移りして、何を目的に訪問したのかよく分からなくなってしまう可能性がある。最近、ユーザーのインターネット体験はどんどん単機能化しつつあって変化が起きている。何をするためにウェブサイトやアプリを訪れてもらうのかを明確にすることが重要だ。そのためには、NHKワールド JAPANの映像メディアとしての立ち位置や目指す方向を決めて取り組むことが必要だ。ニュースメディアとコンテンツ提供メディアの中間の立ち位置、と感じるが、議論を深めることが重要だ。放送からインターネットにシフトしていくと、コンテンツを蓄積してそこから選んで見てもらう視聴形態に移る。選ぶ過程では、ユーザーも番組やチャンネルの強みが何か、そのブランド価値を把握する視点が従来よりも発達してくる。番組一覧でも、「これを見たい」「これが気になる」といった積極的な印象をもってもらうため、その意図をサムネイルなどにより打ち出すことが必要だと思う。プラットフォームやサムネイルのデザインを考えることで、コンテンツやチャンネルのブランドを育てていく意識を伸ばせると思う。
- 1995年にテレビ国際放送を始めてから、現在のサービスまで発展させ、またアメリカにも放送拠点をつくって世界の多くの人々に視聴してもらえるように育てたことに対して、敬意を表したい。また多言語化に力を入れていることは心強く感じている。新型コロナウイルス感染症の拡大を経験して、移動の制限がかかる生活を強いられて

きたが、NHKでも業務のスタイルが変わり、人を派遣するかわりに、海外の機関と協力して取材・制作を行うことが増えてくるのではないか。各国の公共放送局と連携しながら番組を共に作り、SDGsのキャンペーンなどで世界中にインパクトを与えることは、グローバルなリーダーシップを発揮することにもつながる。世界への影響力の大きいアメリカに拠点を設け、ニューヨークにスタジオをつくったのはよいことだが、インド、インドネシアなどの人口の多い国でどのように視聴者を増やすかも、課題だと思う。国内在留外国人への周知に関連して、大学との連携を今後も一層進めてほしい。例えば、良質なドキュメンタリー番組等、教育的価値の高い番組を教育現場で活用できることについて、より効果的に広報するとよいと思う。最後に、NHKワールド JAPANを身近に感じてもらえるようなテーマ音楽を浸透させるなど、戦略的にブランディングに取り組めばよいと思った。

(NHK側) 自然災害時の助けとなるサイエンス系の番組は、局内の科学番組制作者とも連携して開発していきたい。ホームページのデザインについてだが、テレビ、ラジオ、インターネットサービス、ニュースなどすべてをいれ込んだ仕様になっているが、さらに使いやすくすることや、サムネイルなどを工夫し、アクセスを増やしていくことは課題だと考えている。人口の多いアジアの国々の視聴者への周知については、最適な方法を検討していきたい。

(NHK側) 頂いた意見はそれぞれ受け止めて、今後の参考にしたい。今後の検討内容についても共有していきたい。

2021年 5月 国際放送番組審議会

2021年5月のNHK国際放送番組審議会（第680回）は18日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「Magical Japanese」「Reading Japan」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	鎌田由美子	(株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	阪田 恭代	(神田外語大学外国語学部 教授)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 (一財)日本エネルギー経済研究所 参与)
委員	永井 均	(歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授)
委員	中曾 宏	(株大和総研 理事長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)
委員	村上由美子	(経済協力開発機構 (OECD) 東京センター 所長)

(主な発言)

<最近の国際放送の動きについて>

- 「NHKニュース おはよう日本」のキャスターが国際放送に出演するという試みはすばらしい。国内放送・国際放送の壁を越えた人材活用により、マルチに才能を發揮できるきっかけになる。このように、さまざまな形で個人の能力を發揮できる機会は、増やすべきだと思う。
- 日本のテレビ番組では、どちらかというと女性が補佐役になりがちだと感じている。国際放送の場合は、そうは感じないが、今回も、女性キャスターが、力強く、自分の言葉できちんとニュースを伝える姿を明確に届けているので喜ばしい動きだ。ニュースだけでなく、さまざまな番組で、メインスピーカーが、男性と女性半分ずつに近づくのが理想だと思う。
- 国内放送の他のニュースでもキャスターが時々海外の人に直接インタビューしているが、英語のインタビュースキルが高い人がNHKには多いと思う。それらの人たちを国際放送でも起用する道が開けたのは、大変好ましいことだ。ぜひ今後も進めてほしい。

- < 「Magical Japanese」 Cherry blossoms (4月28日(水) 10:45 ほか)
「Reading Japan」 Riding Piggyback to Watch Fireworks
Part 1 (5月3日(火) 9:10 ほか)
Part 2 (5月4日(水) 9:10 ほか)
Part 3 (5月5日(木) 9:10 ほか) について>

○ 両番組ともに、海外の視聴者向けに日本の文化を伝えるという意味で有意義な内容だった。「Magical Japanese」は、桜を通して伝統的な文化や日本の美意識を伝える内容で、西洋との比較により、日本文化や美意識を追求する、伝統的な手法を用いて語られていた。今後は、イスラム文化や、桜を愛でる文化を共有するアジア文化との比較も取り上げてはどうか。アイルランド出身のピーター・マクミランさんは素晴らしいナビゲーターだが、アジアにも多くのふさわしい人物がいると思う。日本文化を、より広い視点で比較する試みにも挑戦して欲しい。

「Reading Japan」は、ラジオ番組として始まった音声コンテンツをテレビ番組化し、またアメリカの公共ラジオ局と提携していく計画とのことだが、効果的な手法だ。今回のテーマになった小説には、家族、女性の活躍や家庭内暴力など、現代社会の実情や問題が描かれているが、これは世界共通のテーマだ。韓国では現代の女性を取り巻く問題を扱う小説がよく読まれており、話題作は日本でも注目された。問題を共有するアジアの若い人も多いので、アジア、またアフリカ、ヨーロッパでも提携を展開できるとよいと思う。

○ 「Magical Japanese」について、日本人でも知らないような言葉があり、勉強になった。映像に加えて、言葉の発音や短歌を詠む声が丁寧で美しく、言語としての美しさを改めて印象づける、素晴らしい番組だ。番組中、桜とともに映る人々の映像にぼかしが入ったシーンとないものがあった。ぼかしの影響で桜の花が見えにくかった場面もあったが、どういう基準でぼかしを入れているのか聞きたい。

「Reading Japan」は、母子家庭や離婚の増加、また、戦後、経済成長に取り残された郊外の街が衰退していく姿が描かれ、今の日本を映していると感じた。ピーター・バラカンさんの淡々とした朗読とシンプルなセット、素朴なイラスト調のアニメーションにより、シンプルだが印象に残る番組だ。3部合わせて1時間は、少々長いと感じたが、全体にあたたかな気持ちになるいい番組だった。

○ 2つの番組ともに、日本の風情や季節感などをうまく取り上げていた。「Magical Japanese」の花見の場面で、現在は新型コロナウイルス感染防止のため“密”状態になる花見をすることは避けられているにも関わらず、マスクなしの過去の映像がそのまま使われていたことは若干気になった。撮影年のキャプションを入れたほうがよかったのではないかな。

「Reading Japan」は、バラカンさんの朗読が、魅力的な味を出している。バラカンさんは主人公の男性と、年代的に近いのではと思えることもあって、作品とマッチしていた。朗読者の人選についてねらいがあれば知りたい。また、第3部で、小説の原文では花火が中国産であるとあったが、この朗読では“made abroad”と国を特定

しない表現になっており、配慮がされていてよかった。

- 「Magical Japanese」は、映像が美しく、あまり使わなくなった表現を含め、6つの言葉が10分間で紹介され、大変奥深い番組だと感じた。「花吹雪」や「花いかだ」など、自然現象由来の表現はわかりやすく、映像も紹介されていて、表現の細やかさについてよく理解できたが、「花疲れ」という言葉で表現される、物憂げなけだるさは、映像があっても少々伝わりづらかった。どのように視聴者に受け止められたのか、奥が深過ぎて伝わらない部分もあったのではないかと気になった。

「Reading Japan」について、アメリカには、車を運転しながら小説の朗読など音声コンテンツを聴く習慣があり、音声コンテンツとして現地のラジオ局と提携した展開はよい試みだ。日本らしい家族の姿が、懐かしさと今がうまく交じり合う物語の中でうまく描かれて、バラカンさんの朗読と淡いタッチのアニメーションもよかった。線香花火に象徴されるメッセージは、日本人には響くが、海外視聴者にとってはどうか、気になった。また番組の長さは少々長いと感じた。

- 「Magical Japanese」は、言葉遣いが多彩で繊細な日本語の魅力を、再認識させられる内容だ。映像が美しく、マクミランさんの穏やかな語り口や、加賀美幸子さんの美しい言葉の響きを繰り返し聞かせつつ、意味と語源をたどる手法で、短時間で日本文化のエッセンスをよく伝えていた。ただ、美意識の違いから、情感などがうまく伝わらないのでは、と思う箇所があった。日本人が自然と身につけている無常観などの感性について、視聴者は、日本固有の意識なのか、東洋に共通なものなのか、など、疑問を持つかもしれない。興味深いテーマなので、別の番組で探求してみてもどうか。

「Reading Japan」で、森浩美さんの短編を選んだのは大変よかった。今の日本において、誰にでも起こりそうな家族の物語の中に、古今東西を問わない家族を思う普遍的な気持ちが、自然な会話で描写されている。起承転結が巧みな物語で、海外の視聴者も楽しめる内容だ。「昼のせみしぐれ」、「まとわりつくような暑さ」などは、外国人と共有するのが難しいと思うが、アニメーションが理解を助けていた。途中までは、アニメーションがかえって想像力を制約するのではないかと思ったが、物語が進展するとともに効果が増した。ほのぼのとした心地よいぬくもりと、懐かしさも残るよい番組だった。

- 「Magical Japanese」の中で、「夢見草」という言葉の紹介場面で、桜が映し出されるが、花に囲まれた空間がハート形になっていて驚き、制作者のセンスに感動した。言葉を2度、3度繰り返してゆっくり読んでいたが、「花いかだ」、「桜吹雪」や「夢見草」という音声は、外国の人にとって美しい響きなのかどうか、若干疑問だ。単語の発音の繰り返しは不要かもしれないと思った。日本の美の感性と、欧米の違いは重要なテーマで、桜だけでなく、人間中心対自然重視という考え方の違いや、石の文明と木の文明など、さまざまに比較ができると思う。違いに興味を抱かせる入り口として、また、考察を深めるきっかけとして余韻を残すよい番組だったと思う。

「Reading Japan」は、物語がおもしろく、バラカンさんの自然でなめらかな朗読を堪能した。アニメーションがあまり主張しないことで、物語がより自然に、心に染み入る感じがした。朗読の場面とアニメーションの場面が行ったり来たりするのは気

が散る感じがして、バラカンさんの映像なしでアニメーションのみで通す選択肢もあったのではないかな。

- 「Magical Japanese」は日本文化の象徴である桜を、言葉と映像で立体的に表現したすばらしい番組だ。マクミランさんは、最良の案内人で、和歌を声に出して読むことで、視聴者は和歌のリズム、語感など、魅力を感じ取ることができたのではないかな。加賀美さんの落ち着いた語り口も、非常によかった。番組の長さもちょうどよく、今後も、日本を象徴するキーワードと背後にある物語の企画をしてほしい。

「Reading Japan」は、さまざまな切り口から家族の問題や、日本の社会を考えることができる、広がりのある良質な番組だ。アニメーションと音、語りの3つの要素がうまく融合し、リアリティーを感じた。物語の中の父親に年齢の近いバラカンさんが、抑制を利かせた調子で語ることにより、安心して聴くことができた。番組の長さは、もう少し縮めることも可能ではないかな。

- 「Magical Japanese」は今年度の新番組とのことだが、今後のシリーズ化に期待ができる内容だ。映像と、マクミランさんの語り、加賀美さんの日本語の繰り返し、アクセントになっていた。ほとんどがソメイヨシノの映像だったが、その他の種類の桜も使って欲しかった。

「Reading Japan」は3話で1時間という長さが見やすいのかどうか、気になった。翻訳について、原作にある地名、例えば目黒川、中目黒、本町商店街などをそのまま使用していたが、外国人にとっては馴染みがない地名で、訳す必要はなかったかもしれない。この短編小説には、日本的なテーマが扱われており、わかりにくい部分もあるかもしれないが、海外の視聴者が日本を理解するきっかけとしてよい選択だったと思う。

- 「Reading Japan」では、バラカンさんの語り口が渋く、深みのある声でよかった。バラカンさんが、日本の文化、社会に深い理解を持っている方と知っているから、深みを感じたとも言える。バラカンさんのバックグラウンドを知らない人が声を聞いたとしたら、どの程度受け入れられたらだろうか。この番組の中でもバラカンさん自身の言葉でコメントする部分などがあれば、日本に対する深い知識や経験がわかり、効果的ではなかったか。また、ほかの番組でもバラカンさんの見方を生かしたものができるとよいのではないかなと感じた。

- 「Magical Japanese」について、マクミランさんの「伊勢物語」の一節の朗読が、イントネーションも含めてすばらしいと思った。英訳と原文のローマ字表記の両方が左右にキャプションとして表示されているのも、外国の視聴者には逐次訳のような形で分かりやすいとも思った。ただ、スピードが速く、両方一度に見ることができなかつたので少し工夫が必要ではないかな。また、マクミランさんの説明の後に、その情景の映像を入れることで、視覚的に理解を助けていたと思う。

「Reading Japan」は、温かみのあるアニメーションとせみの鳴き声や風鈴、線香花火などの効果音が物語の理解を助けていた。家族愛という普遍的なテーマで、外国の視聴者にも共感をもってもらえたのではないかな。バラカンさんの朗読には情感がこ

もっていて適役だと思った。ただ、バラカンさんが真っ暗なスタジオの中で朗読している姿が、アニメーションと交互にかなり頻繁に現れていたのは気になり、私も、全部アニメーションのほうがよかったのではないかと思う。ラジオでは、声だけで聴き手の想像力に委ね、視聴者が物語を膨らませることができるわけだが、テレビでは読み手の姿に引っ張られて、想像力が制約を受けるのではないかと感じた。第3話の最後に翻訳者の名前が小さく表示されていたが、翻訳をどのように捉え、扱ったのかを聞きたい。文学作品において翻訳者の役割は非常に重要だ。非常によい訳だったが、翻訳者をどのように選んだのか。作者の了解についても聞きたい。海外の視聴者にとって、この番組が日本の現代小説に触れる最初の機会かもしれないと考えると、どのように誰が翻訳するかということは、重要ではないか。

(NHK側) 「Magical Japanese」は、海外の日本語学習者をターゲットの一つにしており、国際放送の定時番組として今年度15本の制作を予定している。日本語学習者へのアンケート調査、過去のNHKの日本語番組や国文学者の文献などにある日本語への認識なども参考に、新しい番組を目指した。指摘があった、他の文化との比較については、制作中に意識した点だ。例えば、日本語に見られる言霊信仰とイスラム圏やユダヤ教の言葉の捉え方を比較する研究などから、多様な文化の中で、言葉を“magical”なものとしてとらえる傾向があるということから、タイトルを決めた。文化の比較を西洋との間のみではなく、幅広く行いたいというのが番組制作の原点だ。

確認が取れないものについてぼかしの処理を行った。桜がよく見えなかったという意見もあったので、処理については必要最小限にするよう今後も努力したい。また資料映像の撮影年について、必要な箇所に表示すべきという指摘は今後の参考にする。

(NHK側) 昨年3月にパイロット版として「雨」を放送し、今回の「桜」と合わせて、海外の番組モニターからおおよそ90件の反響が届いており、非常に好評だ。ある程度、演出の意図が伝わったのではないかと考えている。ただ、指摘があった「花疲れ」を説明する映像については選択が難しかった。実際、海外の番組モニターからも分からないという指摘が1件あった。このような意見を踏まえ、よりふさわしい映像を探していきたい。読みを複数回反復することについては、海外の番組モニターには非常に好評だった。例えばインドネシアの視聴者から、「一緒に声を出して反復できてよい」というような意見もあり、さらに「まだ反復が少ない」という意見もあったので、今後、海外の視聴者の反響などを見ながら演出を検討していきたい。

(NHK側) インターネットにおいても日本語のコンテンツは、恒常的に高いアクセス数を得ている。単なる日本語学習コンテンツ以上の、美意識などの考察も含めた内容を届けることに取り組んでいる。

(NHK側) 「Reading Japan」は、元のラジオ番組が20分で、同じ長さで制作し

た。また、小説の長さを考えると、1度に放送することは困難であり、3回に分けた。適切な番組の長さについては、本日の意見も踏まえ、引き続き検討していきたい。番組モニターからの報告を読む限り、家族の問題、主人公の気持ち、社会状況等については、文化背景の異なる視聴者にもほぼ理解されたと考えている。中目黒などの地名など、分からない部分もあったかもしれないが、物語自体の理解の妨げにはならなかったのではないかと考えている。全体としては、なるべく原作を忠実に訳すことを心がけたので、あえて地名を省くことはしなかった。作品の選択については、短編であることのほか、日本の文化や社会が表現されていること、またラジオで多言語に翻訳する際には、宗教的な事項等も考慮している。

(NHK側) ラジオの朗読番組を、テレビ番組化するにはさまざまな映像表現があり得るが、原作の魅力やラジオの雰囲気や壊さずに、日本の風情をよりよく伝えるというねらいから、本の挿絵のようなアニメーションを入れるのがいいのではないかと考えた。どのような人が朗読しているのかを知りたい視聴者もいるのではと思い、バラカンさんの映像をはさみ、また朗読に戻るという演出をした。初めての試みなので、意見を参考に、今後の方針を考えたい。バラカンさんの人選に関してだが、年代は大いに考慮した。バラカンさんは、作品の設定に近い方で共感を呼べる読み手だと考えた。淡々とした朗読にはバラカンさんの人生も反映され、日本文化への理解もにじみ出ており、バラカンさんならではの味が出たのではないかと考えている。翻訳者の選択について、文学作品を翻訳するにふさわしい方を探した。また、翻訳はこの番組にとって大切な要素であり、原作者の許可を取ったうえで、翻訳者はもちろん、ネイティブの意見も参考にし、読み手であるバラカンさんが読みやすく、内容を深められる表現になるように、さまざまな意見交換をして翻訳した。

2021年 4月 国際放送番組審議会

2021年4月のNHK国際放送番組審議会（第679回）は20日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「Fukushima Monologue」、「Zeroing In: Carbon Neutral 2050」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	鎌田由美子	(株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	阪田 恭代	(神田外語大学外国語学部 教授)
委員	佐藤可土和	(クリエイティブディレクター、(株)サムライ 代表取締役)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 (一財)日本エネルギー経済研究所 参与)
委員	永井 均	(歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授)
委員	中村 勇吾	(インターフェースデザイナー、tha ltd. 代表)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)
委員	村上由美子	(経済協力開発機構 (OECD) 東京センター 所長)

(主な発言)

<最近の国際放送の動きについて>

- アメリカ公共ラジオと連携し、英語ニュース番組を配信する枠組みにおいて、アラスカ州で新規に配信を開始したと報告があったが、非常に心強い。更に国際連携を強化し、戦略的に進めてほしい。

<「Fukushima Monologue」 (4月3日 (土) 10:10 ほか) について>

- 東京電力福島第一原子力発電所の事故をきっかけに、人間と自然との向き合い方、自然に対する責任ある行動とはなにか、を考えさせる番組だ。自然と懸命に向き合おうとしている主人公の松村直登さんや、東北の住民の努力について、あらためて勉強になった。松村さんについての、ドキュメンタリー映画が過去に作られたことを承知

しているが、この番組はNHKの独自制作かどうか、経緯を知りたい。

- 被災後、生活が難しい状況にある人を、時間をかけて丁寧に取材していると感じた。すばらしい自然の映像とともに深いストーリーで感銘を受けた。松村さんのモノローグを効果的に使い、自然と人間の関係性を深く考えさせる構成になっている。エンディングでは、生まれた子犬が元気に走る姿を印象づけ、将来への希望や明るい再スタートを感じさせてよかった。ただ、生活の安全性、健康への影響について、見る人に十分伝わったか、少し気になった。除染作業が進行し、生活できるレベルになっていることや健康に影響が出ていないことを、科学的データを挿入して補強などすれば、なおよかったのではないか。
- 松村さんの魅力的なキャラクターや、自然をとらえた映像の美しさが心に残った。松村さんは、事故が発生した当時、避難指示が出た後も富岡町にとどまり、国や行政の対応から漏れてしまった問題に立ち向かった。行政側などがこのことをどのように受けとめるべきか、ジレンマも感じた。また、放射性物質が蓄積しやすいキノコから、高い放射線量が計測される場面があったが、海外の視聴者が、福島や日本の農産物などの安全性に懸念を抱かないか、気になった。最後のシーンでは未来への希望も感じられ、また、戦後の経済成長の中で、特に地方において失われたものは何かということを知り、そこから学ぶ必要があることを、次世代に伝えるメッセージとしても伝わったと思う。全体的にすばらしい番組だった。
- 松村さんの人生を縦軸に、東京電力福島第一原子力発電所の建設から、震災前後の富岡町の動きを横軸に据えて、被災地に生きる人と社会がよく描かれ、感動した。震災で取り残されたものに焦点を当てたところがよかった。取材者と松村さんの信頼関係にもとづくやりとりから松村さんの等身大の生き方が伝わり、映像と音楽の美しさも印象深かった。動物から見た震災という番組の視点は、新しく貴重だ。松村さんが、取り残された動物たちに関わることになる理由について、松村さん自身が番組で語っていたが、そのさらに奥で、どんな原動力がはたらいたのか、もう少し知りたかった。番組ではセリフのない自然の音だけの映像が何回か出てくるが、その静寂が、立ち止まって考える大切さを暗示しているのではないかと感じた。
- 番組の中で、除染と食の安全性についてもう少し詳しい説明があるとよかった。除染されている地域と、除染されていない山中の作物ではリスクの違いもあるし、県内でリスクがあるのは限られた地域であることも含め、海外の視聴者にはわかりにくい部分だ。松村さんが東京電力福島第一原子力発電所の建設に自身も関わったことで、責任を感じると話しているのを聞いて、農作物や電力の大量消費地である東京に暮らす人間として自分自身を振り返ると、松村さんの言葉が重く響いた。松村さんが、動物たちの命を救うために福島に残ったことについては、賛否や葛藤もあったと思う。さまざまな重い課題をつきつけるドキュメンタリーだ。
- 廃墟になった町の中に動物がいて1人の男がいる、という情景が、多くのことを描写し、強い印象を残している。感染症により世界でただ一人生き残った主人公と動物

たちがニューヨークで暮らす映画を思い出した。映画の主人公と違って、松村さんは、原子力発電所の建設に加わった責任の一端を感じ、複雑な思いを持って町にとどまっているのだが、なぜそこまでしてこの場所にとどまっているのか、その内面の掘り下げがもっとあればよかった。

- 松村さんに、人間としての格好よさを感じた。松村さんからうまく引き出された雄弁なモノログにより、ドキュメンタリーの独特なトーンが作られた。10年間という大きな時の流れの中にドラマがあり、四季の移り変わりとともに松村さんの生き方が見えてきたのも興味深かった。ただし49分という放送時間は、少し長いと感じた。また、東京電力を、「TEPCO」と説明していたが、海外の視聴者にはわかりにくいのではないか。さらに、東京電力福島第一原子力発電所との距離を、一目でわかるように地図で示した方がよかったのではないか。
- 「Fukushima Monologue」というタイトルに引かれた。原子力発電所の事故という悲惨な現実から、次第に転調し、新しい生命によって希望を感じたり、人々が初日の出を楽しむようになったり、と希望が見えるエンディングへとつながるストーリーの流れがよい。ナレーションなど客観的な説明をなくして、松村さんの発言のみで構成する番組にすれば、より迫力を感じ、また効果的に自然の映像の力を感じることができるのではないかと思った。
- 5年ほど前、松村さんが主人公のドキュメンタリー映画が発表され注目をしていたので、今回この番組を見て衝撃を受けた。白骨化した家畜、路上を歩くダチョウや子犬の誕生、そして、朝日をおがむ様子など、いずれも静かなインパクトを持つ映像で、一つの作品の中に、これだけアイコンックな場面をたくさん入れ込めたのはすばらしいと思った。日本的な美意識があり、間の取り方もよく、NHKの映像づくりの底力を感じた。震災から10年で、あらためてこの事故や原子力発電所が世界でどう捉えられているのか、見終わった後に考えさせられた。
- 松村さんが、ギラギラしたところや恨みがましいところがなく淡々とした姿や放置されたペットや家畜の命を大事にしている姿に、非常に好感を持った。また、エンディングの「Step by step. On we go. Walking along the path to “normal.” In my hometown. Our hometown. (一歩ずつ、当たり前の日々を取り戻していく。俺のふるさとで。いや、「俺たち」のふるさとで。)」という言葉も印象に残った。気になったのは、富岡町の、土壌、水質の汚染度合いに関して、番組では具体的なデータが紹介されなかったことだ。また、沢の水などを飲んでいる松村さんを映すことで安全性が担保されているかどうかともいわず暮らしているように見えてしまい、食や農産物に対する不安をあおることにつながるのではないかと心配になった。風評被害を起ささないように丁寧な説明が必要だと思う。
- 大変すばらしいドキュメンタリーだ。震災から10年たって、まだ10%以下の人がしか帰還していない状況、動物たちが取り残されている状況を見ると、震災と原発事故の影響がこれからも続くことを考えさせられた。重いテーマを、松村さんの生き方

や美しい映像などで効果的に伝えていた。ただ、富岡町の位置について、地図を用いて示し、避難の対象地区を区域別に示すなどの工夫があった方がわかりやすかった。キノコの話の部分では、食の安全に対する不安が増し、海外では、やはりまだ普通の生活には戻れていないと受け取られるのではないかと。

(NHK側) 2017年に松村さんを取材し、「福島タイムラプス」という番組を作った。その後、継続して松村さんとの関係性を築いてきた。その過程で、松村さんには、ふるさとに残ることを決断した理由、原動力を問い続けた。「たった1つしかない生まれ故郷、ふるさとだから死ぬまでいたい、命を見殺しにできないから動物たちの面倒を自分が見る」と、強くシンプルな回答だった。松村さんを通じて震災後10年、ひいては戦後の日本が追い求めてきたものはいったい何だったのかが見えるのではないかとという考えが番組を企画した動機だ。自然の風景や音を感じることで、失われていたものに気づいて欲しいという思いで、ゆったりとした作りになっている。49分がいつもより長く感じられたかもしれない。今後、しっかり見てもらえるように、工夫を重ねたい。「TEPCO」という表現ではわかりづらい、地図を示すべきという指摘についても、今後の番組制作において検討したい。データなどの客観的な説明については、テロップで表現する演出を試みた。指摘をもとに今後いろいろ検討したい。キノコが放射性物質を蓄積しやすいことは、チェルノブイリ原発事故の際にも明らかになっており、それ以外の農作物に関しては、放射線量はほとんど下がっている状況だと番組内で伝えた。沢の水も放射線量は既に下がっていて、飲用にしても問題ないとされる数値だ。松村さんは安全性を気にしない人ではなく、被害の現実の中でも希望を捨てずにいる人なのだと受けとめてもらえればありがたい。

< 「Zeroing In: Carbon Neutral 2050」

Episode 3: Uncommon Ground (2月27日 (土) 8:10 ほか)

Episode 4: Recharging the Grid (2月28日 (日) 8:10 ほか) について>

- 多くの方が興味を持つ内容で、簡潔にまとめられ、番組の長さもちょうどよかった。身近なところから試せる事例が入っていたのが興味深く、特に家庭での節電はハードルも低く、家族でゲーム感覚で取り組むことができると思った。グリーンエネルギーに力を入れる中で、風力発電が取り上げられているが、自然の中に風力発電の施設を作ることについては違和感がある。グリーンエネルギー推進の良い面にスポットを当てすぎていないか、気になった。
- ニューヨークのスタジオを利用して、シリーズで展開することはとても有意義だ、ぜひ続けてほしい。気候変動を防ぐ取り組みを伝えるのは、4月のバイデン大統領の気候変動サミットや11月のCOP26もあり、タイムリーな取り組みだ。日本政府

の主要政策の1つでもあるので、積極的に取り上げてほしい。アメリカの事例を中心に紹介したことは、アメリカのイメージの変化にもつながりよいことだと思うが、市民のみでなく、政府の国際的な責任についても触れるべきだと思う。気候変動対策ではエネルギーを中心に上げがちだが、第3話「Uncommon Ground」で着目している農業は、これからもう1つのトレンドになると思う。

- 「Uncommon Ground」で農業に目を向けた点がよかった。タイトルを「Uncommon Ground」とした意図がよくわからないので教えてほしい。第4話「Recharging the Grid」は、さまざまなサービスや事例が紹介され、興味深いのが、家庭内で電気を節約するシーンで、最初から誰もいない部屋に電気がこうこうとついているような状態は、過剰なのではないかと気になった。日本の新電力についての取り組みが紹介されているが、仲介業者は発電を行っていないことが多いので、取り上げるのが適当か疑問を持った。
- 両エピソードとも、注目を集めている事柄がテーマで、特に「Uncommon Ground」は、不耕起栽培の最先端を知ることができ、興味深かった。25分という放送時間、スタジオとVTRの組み合わせは番組のフォーマットとして安定感があるが、2本続けて見ると変化がなく、少し型にはまっているので、もう少し工夫があってもよい。
- 現在、カーボンニュートラルに向けた課題を抱えているのは、人類が行ってきた際限のない大量消費社会に対するアンチテーゼではないか。このシリーズでは、問題に向き合い、身近なところに個人の努力で解決できるヒントがあることを示していた。世界に向けて、NHKワールド JAPANがこのような番組を発信していることは大変意義があり、今後も関連する内容について発信してほしい。
- 脱炭素、気候変動は、今後20～30年話題になるテーマで、しっかりと考えていくべきだ。企業価値やガバナンスとの関わりで話題になることが多いテーマだが、土壌や太陽光からこの問題を取り上げ、生活に密着した議論を提起しているのは新鮮だ。アメリカの公共放送サービスであるPBSとの連携を試みたことはよいが、日本側が取材した部分が少ないのではないかと感じた。「Uncommon Ground」では、カリフォルニアの実例では、結果を出すためのヒントが紹介されたが、日本国内で、水田に野鳥などが集まって来た事例でも、どのように取り組めば有効な結果が得られるのか、具体的なヒントが欲しかった。「Recharging the Grid」について、地産地消の電力開発は必ずしもうまくいっていないケースもある。番組に課題も含めた方がよかった。スタジオの司会者に、アメリカ在住の日系人を起用するのは大変いいアイデアだと思う。
- カーボンニュートラルの話をも日本の新聞やテレビで取り上げる際、まず、地球は危機的な状況にあるとあり、その上で解決の道筋へという流れが多い。この番組のオープニングはポジティブで、ニューヨークスタジオのホストも登場人物も笑顔が印象的で、アメリカの議論における先進性を感じた。両エピソードとも、問題の全体と個別の解決法の関係性がつかめればさらによかった。例えば不耕起栽培や電気を節約し

ていくという個人単位の行動が、全体のカーボンニュートラルの中で何%くらいの効果があるのか知りたい。厳密には難しいと思うが、自分の取り組みがどれくらい意味を持っているのかを体感できるように、数字を示したほうがよかった。

- 専門的な知識を持たない、一般的な視聴者を想定して、わかりやすい事例を使いながら、科学的説明とのバランスをうまくとっていた。ただ、日本の事例については、そこから学べることをはっきり示していなかったのが残念だ。番組の構成として、アメリカと日本を比較するのはとてもいいアイデアだが、日本の部分をもう少し工夫できたのではないかな。
- どちらの番組も楽しく見た。「Recharging the Grid」について、自然エネルギーを使うことが化石燃料を燃やすよりも二酸化炭素の放出量が少なく望ましいというのは理解できるが、自然エネルギーを取り出すために、風力設備や太陽電池を作る過程で排出される二酸化炭素についても気になる。自然エネルギーを使うためのエネルギー消費についても考えた上で根拠を示したほうが、説得力があった。二酸化炭素の量を測ることが難しければ、初期投資が何年で回収できるか、などの経済的な検証を加えることによっても説得力が増したのではないかな。
- SDGsという言葉が広まる一方で、ゼロ炭素、気候変動、エネルギーの問題を自分のこととして十分にとらえられていないと感じる。このシリーズは、啓発的で示唆に富み、日本の気候変動対策の一部がかいま見えてよかった。コメンテーターのグレッグ・ダルトン氏の実践例を映像で紹介することで、より親近感が増し、キャサリン・コバヤシさんの司会もよかった。「Uncommon Ground」では、カリフォルニアでの耕さない農業の実践例を初めて知ったが、こうした試みが実際にどの程度広く実践され共有されているのか、また日本の事例についてもその意義や課題についてより深く知りたいと思った。「Recharging the Grid」は、日本の状況を合わせて見ることで、気候変動対策をめぐる日本の世界的な位置を探る観点や視点を提供していた。
- この番組がどのような経緯でアメリカのPBSと連携して制作するようになったのか、カリフォルニア州でのゼロ炭素社会構築に向けた動きを取り上げた、この番組の背景について知りたい。

(NHK側) 北米はテレビ国際放送の配信の重点地域の一つである。2009年に24時間での英語放送が始まったが、現在では、アメリカの多くの大都市で24時間NHKワールド JAPANが視聴できる環境になったのに加え、おおよそ350あるアメリカのPBS局に向けても、いくつかの定時番組の配信を行っている。視聴可能世帯のおよそ80%である約1億世帯がNHKワールド JAPANの番組に触れられる受信環境になっている。環境問題についてはPBS局との意見交換を続ける中で、今回、環境番組に力を入れているサンフランシスコの「Northern California Public Media」と連携

してシリーズを制作することになった。今後ロサンゼルスやニューヨークのPBS局などとも連携を探っていききたい。

(NHK側) 今後、日本の事例についても深く取材し、個別の事例からヒントとなることを示すことも含め、番組の作りを工夫して進めていきたい。経済の面や企業の取り組みも取り上げて、しっかりと取材をしていきたい。

(NHK側) 「Uncommon Ground」のタイトルの由来について、“Common Ground” と言えば、共通の課題、立ち位置、という意味だが、“Ground” には土地という意味もある。その“Ground” にかけて、特別な、スペシヤルな土に注目するという意味で、このタイトルをつけた。